

ドイツでもお金に随分不自由したが、ヨーロッパの旅行は、殆ど最低の費用で廻つたろう。勿論、殆ど総てが三等車（昨年六月から欧州では一・二等車のみとなり三等車は廃止されたが）で廻つた。駅に着くと、先ず地図を買い、駅の喫茶室でそれをよくよく眺め廻す。そして町の全貌と交通系路をのみこんでから、徒歩か市電・バスなどで歩き回る。どこにいくにも、タクシーを利用したことはない。従つて、道に迷うこともある。すると人にもきかなければならない。安いホテルを見つけるのも一と仕事である。土曜日曜にぶつ

かつて、ホテルがなく情ない思いをしたこともある。奮発して多少よいホテルに泊つたのに、湯の出ない室だったこともある。意外によいパンジョンで、非常に大切に扱われたこともある。その苦しかったり楽しかったりした思い出はつきない。然し、静かに一年をふり返つてみて、強い印象となつて蘇つてくるのは、ドイツでも旅先でも親切にしてくれた人たちの顔である。その親切は儀礼的なものでなく、短期間のつき合ひであつても、心を打ち明けて話し合うことの出来た人たちの顔々々である。

表紙について

武井武雄

よりよつて私が多忙の絶頂で悲鳴をあげているまづ最中に、及川さんとフレールベルとで強引に「幼児の教育」の表紙を割込んでしまった。私はテーブルの上に額でゴツンと音をさせてお辞儀をしてあやまったのだが、どうも勘弁して貰えない模様だった。何ともはや万止むを得ない仕儀と相成つてしまった。もし万目注視の路上でこういう割込みをやつたらきつと正義を重んずる群衆の為に及び彼女はなぐられて怪我をしたであらうと思う。

四色よりも三色、三色よりも二色の方が簡単で描くのがらくだろうと素人は考える。らくなのは製版と印刷との方で、描く側にとつては色数が少ない程むづかしくなる。その上一色だけは年間に四回も変るとこれは手品に類するもので、筆者は障害物競走をやらされてゐるようなものである。

貝の形の面白さは昔から注目していたのだがまだ画に登場させた事はせいゝ一度位しかなかつた。これは実物を掌にのせて造化の妙に駭くというのも結構だが、写真などで見てそれを小豆粒位の大きさに縮少して想像したり、ビルディング位の大きさに空想して楽しんでみようと造型の不思議の唯ならぬ事を知る事が出来る。

ハッキガイ（白鬼貝）は五センチ位のものだそうだが、そんなちっぽけな駄體でも充分鬼の風手と貫録とをそなえている。植物でも貝類でもその命名者のうまさに屢々感服する事がある。この表紙は子供のかき上れる位にまで拡大したが、この拡張には税金も手間も何にもかからない。ここいらが些少なからえかきの特権というものらしい。